

“Good” organizational reasons for “bad” clinic records についての コンメンタール

中恵 真理子

1 「不十分なカルテの十分秩序だった理由」についての日本における評価

「不十分なカルテの十分秩序だった理由」について、日本のエスノメソドロジー研究ではどのように評価されてきたのだろうか。そのことを探るために、日本の学部生及び大学院生向けに書かれたエスノメソドロジーのポピュラーなテキスト（教科書）で、どのような文脈で紹介されているのかをこの研究ノートではみていく。なぜテキストに絞ったかといえば、テキストでは論文に対する著者の個性的な評価というよりはエスノメソドロジストたちの間で、共有されている優勢な評価というものを取り出すことができるように思われるからである。そのテキストとして、山崎敬一編（2004）『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣と前田泰樹・水川善文・岡田光弘編（2007）『エスノメソドロジー』新曜社を扱う。

1-1 『実践エスノメソドロジー入門』

このテキストは、基礎編、実践編、展開編と三部構成で編集されている。「不十分なカルテの十分秩序だった理由」の論文が紹介されているのは展開編の、池谷のぞみ・岡田光弘・藤守義光らによる「13章 病院組織のフィールドワーク」においてである。

この章によると、まずエスノメソドロジストと医療研究との歴史的ななかかわりの深さが述べられており、この分野の研究では、会話分析に基づいたものとフィールドワークに基づいたものとの二系列があったことが指摘されている。「不十分なカルテの十分秩序だった理由」の論文はフィールドワークに基づいた研究の系列の初期の代表作として扱われており、「彼ら【ガーフィンケルとビットナーやもう一つの代表作の著者であるサドナウら】が抱いていた一番の関心は、現場で医療に携わっている人たちが、実際に作業を進める様子や手順を、具体的かつ詳細に再構成しようとする事だった」という（池谷・岡田・藤守〔2004〕：195）【中恵注記】。つまり「医療」という具体的な場面での固有の論理を探求することが目指されており、ここでは直接には述べられていないが、「医療」にかかわる事柄を研究者が理念型を提示することによってそこから説明するのではないことを主張しているように見える。そして、「たとえばガーフィンケルは、一見欠陥だらけに思える診療記録が、実は、そのクリニックにおける医療実践と結びつく形で、現場の実践を滞りなく成り立たせるリソースとしてきわめて「論理的」に構成されていることを提示した」と紹介されている（池谷・岡田・藤守〔2004〕：195）。これは従来の研究態度では、「不十分なカルテ」というものは理念型からの偏差あるいは誤差として扱われるのを、そのクリニックにおいて「現場の実践を滞りなく」成り立たせるリソースとして扱われようと主張しているのであり、それまでのワーク研究のなかでエポックメイキング的な位置を占める研究だっ

たという紹介になっているように思われる。そしてこれらフィールドワークに基づいた研究の研究姿勢とは、「彼らが活動する組織に固有な、どのような知識のストックに基づいて互いに、いかに協働するのか、という点を詳細にしようとする」(池谷・岡田・藤守〔2004：195〕)と位置付けられている。

このテキストでは「不十分なカルテの十分秩序だった理由」は、カルテが不十分であるからこそ、それには秩序だった理由があるという信念のもとで研究したことで、その病院固有のスタッフによる知識のストックというものが明らかになったと評価しているように思われる。それは「不十分なカルテ」を素材とした組織研究またワーク研究だったという位置づけになっているように思われる。

1-2 『エスノメソドロロジー』

『エスノメソドロロジー』では「4章 合理的であるとは、どのようなことか」で、「不十分なカルテの十分秩序だった理由」の論文が言及されている。まず、エスノメソドロロジーにおける合理性の考え方として、「観察・報告可能性こそが、エスノメソドロロジーの観点からすると合理的ということになります。」(中村〔2007〕：76)と述べた上で、エスノメソドロロジーがいかにして、この合理性にたどりついたのかを述べている。つまり『エスノメソドロロジー』においても、「合理性」ということを考える上で、「不十分なカルテの十分秩序だった理由」がやはり従来の研究態度に対するエポックメイキング的な役割を果たす論文だったと評価しているのである。

4章ではまず始めに従来の「合理性」の考え方について述べられており、そのあと「不十分なカルテの十分秩序だった理由」によってどう乗り越えていかれたかを、説明している。具体的にまず歴史的に振り返れば、パーソンズは社会秩序の安定は、人々が規範を内面化しているからであると秩序を説明しているという。しかしこのような考え方に立てば、ガーフィンケルが指摘したように、人々は一度内面化した規範を変更することもなければ修正することもできない「文化的な判断力喪失者」だということに人々はなってしまう。つまり従来の研究では、合理性とは、行為者が規範を思い浮かべた時、価値合理的かつ目的合理的な行動様式というものが自然と演繹できるようになっており、それに準拠した行為を合理的、それから外れた行為を非合理的もしくは逸脱という捉え方をするのであり、そこに行為を説明する上で、限界があるように主張している。ガーフィンケルはこのことを「一物一価の規範」にかかわらせて批判するために、「定価のある商品」を値切ってみるという課題を与え、学生は見事この課題を達成したという。そのことから規範を内面化するのではなく、それを使って(時に修正して)なされるさまざまな実践こそが、社会の日々の営みそのものであり、観察報告可能になっているという意味で合理的な社会現象であることを主張したとしている。

さらに既存の社会学の調査は、間違い探しの社会学になっているという。しかしそこからは現実の社会活動の合理性はつかめない。そこでガーフィンケルがとった方法は、「より

よいモデルを社会（科）学者が構築しなくとも、すでにわれわれの日常生活は、理に適って成し遂げられている」（中村〔2007〕：78）という視点に立つものだったと指摘している。そこで合理性のエスノメソドロジー研究にとって、最大の転換点となる論文として「不十分なカルテの十分秩序だった理由」について言及している。「ガーフィンケルは、それまでの社会学の調査のように、こうしたカルテの「不十分な」事態を指摘して、カルテの書き方に修正案を出すことは行いませんでした」「その代わりに、不十分なカルテの理由を考えました」それは「カルテがある特定の状況の活動の構成要素であり、その活動において観察可能で報告可能である」というガーフィンケルの強調点につながるとしている（中村〔2007〕：80）。つまり『エスノメソドロジー』は様々な活動が観察・報告可能になっていくこと、その仕組みを解明することが目指す合理性の探求になったということで、合理性を説明可能性・報告可能性の次元に求めるということでエポックメイキングの役割を果たしているように思われる。

1-3 まとめ

『実践エスノメソドロジー入門』と『エスノメソドロジー』による「不十分なカルテの十分秩序だった理由」の評価を見てきたが、ここから何が言えるだろうか。

共通に言えることとして、研究態度に関する転換がこの論文によってあったことがいえるだろう。つまり、われわれの日常活動ここでは医療という場面は、そのまま理にかなって成し遂げられているのであり、それがどのようにいかにして成り立っているかを説明するというものである。『エスノメソドロジー』ではそれをもう一歩推し進める形になっており、有意味であることすなわち観察・報告可能性こそが合理性であり、「カルテの不十分さ」は「不十分であること」によって有意味であり、それには理にかなった説明が可能だとしているのである。

この2つの研究から言えることは、「不十分なカルテ」には「十部秩序だった理由」があること、病院に関わって交錯した複雑な利害状況というものがあること、この2点であろう。そこから「医療」というワークに関わる多様な目的の多様な行為ということが、取り出されていくことだろう。それは従来の研究では気づかれてはいたが扱われはしなかった、場面を構成する「状況」というものを描くことになっていくように思われる。

しかしながら従来の研究では、ある目的について、そうした目的だからこそ非合理的だと価値判断をした上で、そのような非合理的な価値基準に縛られない理想の業務の在り方を対置的に提示している。これについてはクリニック自体が時にそのような観点から、業務を評価したく考えるという設計はありうることであるから、従来の研究を無意味なものとする必要はないと思う。すなわち、上記の2本のテキストを読んで明らかになることは、それ自体新たな研究態度というものでなされる研究が可能なのであり、またそうした研究態度に基づいた論文はこのようになる、ということであった。

参考・引用文献

Garfinkel Harold、1967、“Good”organizational reasons for “bad” clinic records 、*Studies in ETHNOMETHODOLOGY*、POLITYPRESS.

池谷のぞみ・岡田光弘・藤守義光、2004、「病院組織のフィールドワーク」山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣。

中村和生、2007、「合理的であるとは、どのようなことか」前田泰樹・水川善文・岡田光弘編『エスノメソドロジー 人々の実践から学ぶ』新曜社。